

報道関係各位

2013年11月吉日

年末に初めて知る、大切な人の訃報が急増！ お線香付き電報（弔電）キャンペーン12月2日スタート

電報サービス VERY CARD (www.verycard.net) を提供する株式会社ヒューモニー（東京・代表取締役 今村彰利）は、家族葬や直葬*注が増加し、年末に喪中はがきで大切な人の訃報を知ることが多くなった現代の新しい弔慰の伝え方として、お線香付き電報を活用していただくことを提案する「2013 喪中はがきが届いたらキャンペーン」を12月2日（月）より、当社ウェブサイト <http://www.verycard.net/special/mourning.html> で実施いたします。同サイトでは、喪中はがきで訃報を知ったときの対応方法、「喪中はがき」の正しい書き方をご紹介します。

喪中はがきの今昔

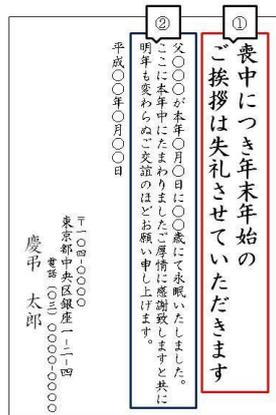
喪に服している人（身内を亡くした人）は年賀状を出さない風習があり、12月上旬頃、「喪に服しているので、こちらからの新年のご挨拶を遠慮させていただきます」というお知らせをするのが「喪中・年賀欠礼状＝喪中はがき」です。喪中の期間の正式なルールはありませんが49日や1年が目安となることが一般的です。

◆ いつ、誰が亡くなったのか分からない喪中はがきが増えた理由

正式な喪中はがきには、亡くなった月日、故人のお名前、差出人との続柄を書きますが、それらの情報が記載されていない喪中はがきも最近多くなっています。

<その理由> ①身内の不幸をひとに知らしめることに抵抗のある人が増え、あいまいな表現の文章にしている。②ウェブ、プリントショップ、コンビニなどで、上記の情報が含まれない、間違った喪中はがきのひな形が流通している。

<その影響> 情報の少ないはがきを受け取った人は困ってしまう。どなたが亡くなったかわからない場合、お悔やみの言葉選びが難しく、また、例えば、逝去後49日で「香典」「供物」の表書きは、「御霊前」から「御仏前」に変得る必要があるが、亡くなった日がわからなければそれも判断できず混乱する。



① 年賀欠礼のご挨拶文

「年賀」という言葉は使わない。また「拝啓・敬具」なども不要です。

② 逝去のご報告

故人のお名前、続柄、命日、年齢を記載します。ただしお知らせしたくない項目は記載しない場合もありますが「命日」の記載が無い場合「忘明けしているのかどうか？」が分からなくなりますので「命日」は記載したほうが親切でしょう。

◆ 喪中はがきで訃報を知る事が増えた理由

知り合いが亡くなり葬儀が行われたことを知らず、12月に届いた喪中はがきで訃報を知るというケースが多くなっている。

<その理由> ①高齢化：65歳時の平均余命は2010年データで男性が18.86年、女性が23.89年と男女とも高齢期が長くなる傾向。会社リタイア後の生活や療養生活などが長くなることで、亡くなった時に社会との関係性が薄くなっている場合が多く、訃報が行き届かない。②葬儀形態の変化：葬儀・告別式を行わず荼毘にふす「直葬」が増加している。また、身内だけで式を行う家族葬が増えているため、お知らせをしないことが一般的になっている。

<その影響> 受け取り人がはがきを受け取った時点で葬儀は終わっており、香典を送るか、1月に寒中見舞いを送るか悩む。

*注・・・夜や告別式などの宗教儀式を行わない、火葬のみの葬儀形態。

喪中はがきで訃報を知ったときの弔慰の伝え方

<これまで> 葬儀に出席し、既に香典などで弔慰は伝えてあるので、翌年の松の内（1月7日）の明け以降に寒中見舞いを出すのが一般的でした。

<現代>

1. 喪中はがきで訃報を知ったら、すぐに電話、手紙、電報などで弔慰を伝えましょう。
2. 特に大切な方の訃報であった場合、香典を持参し弔問に伺うか、遠方であれば香典を郵送するようにしましょう。

